

「国家公務員等採用I種 試験合格者祝賀・激励会」

35人合格、11人が中央省庁に内定 夢と希望を胸に、高い志をもって!!

「2007年度国家公務員等採用I種試験合格者祝賀・激励会」が
昨年12月15日、後樂園キャンパス3号館10階で行われた。
今年度の合格者は35人で、うち11人が中央省庁から内定を得た。
この日は、その中から12人が出席。会場には永井和之総長・学長をはじめ
大学関係者のほかOB・OGや同じ道を志す後輩など約80人が参加し、
和やかな雰囲気の中で合格者を祝うとともに、今後の活躍を祈念した。

学生記者
橋本奈緒美(大学院理工学研究科博士1年)
武田朋実(法学部3年)

◆信念と自信をもって

午後5時、開会。まず永井和之総長・学長が「今の気持ちを忘れずに、周りからの期待は大きく、重たいかもしれないが、それに耐えて、頑張ってほしい」と挨拶。続いて、本学卒で元総務庁行政管理局長の瀧上

信光・千葉商科大学政策情報学部長が「国家I種に合格したという事実は、人生において大きな財産と大きな自信になることでしょう。とてもやりがいのある仕事です。高い志を持って、積極的に色々なことに挑戦し、国民から信頼されるよりよい国家公務員になってください」と激励した。

また学員会の久野修慈会長が「私は公務員にとって『天敵』の立場の人間ですが」と笑いを誘ったうえで、「まずは、今までお世話になった先生方に感謝しなさい。人間としての使命感を持って、どういう形で自分の意思を貫くか、自制心が大切だ。政治家の間では様々な不祥事が

浮上しているが、政治家がどうであるうと、君たちは信念と自信をもって頑張ってほしい。自分が持っているものを武器にして、戦いを挑んで欲しい」と辛口ながらも心のこもった励ましを贈り、乾杯の音頭をとった。立食パーティーに移ったあと、合格者にインタビューした。

◆人の生命や生活に関わる

出席した合格者の中で紅一点だったのが、石田麻衣子さん(法学部)。





合格祝いのあいさつをする永井和之総長・学長

校で友達を作ったり、同じ省を志望する人で集まったりして対策を考えたこと

が合格の決め手になったと思います

石田さんの内定先は厚生

労働省。第一志望だった。「初

めは弁護士志望だったが、人の

生活や命に関わる問題は理論や

金銭での解決には委ねたくない

という思いがあり、そういった分野で法律や制度を整備してもそもそも

問題が起きないようにする仕事がないと考えると、厚生労働省を志望した。

内定をいただいた今、人の生活や命に直結する仕事に携わっていくこと

への責任を強く感じている」というのが厚生労働省を選んだ理由と抱負だ。

◆公務員制度に関心

総務省から内定を得た大越諭さん（大学院公共政策研究科）は、経済学部時代に国家I種を受験し、試験には受かったが面接の結果がふるわず、今回が二回目の挑戦だった。

「試験に受かってからがスタートで、面接が難しいんです」という。

面接では、「『敵を知り己を知れば百戦危うからず』という孫子の言葉

があるけど、その言葉の通りに、行きたい省庁の情報収集をして分析すること、自分の能力を知ること。

その両方があつたら、何回やつてもうまくいく」と秘訣を披露。

「総務省は、業務の幅が広くて、いろいろなことができる。例えば、行政評価で、いろいろな省庁の政策を評価します。いろいろな省庁に関われる

からおもしろい。今は、行政をしつ



かりと支えていく公務員制度改革に興味があつて、それに関わりたいです」と抱負を語った。

◆教育の格差是正めざす

「学部時代は、サークルでソフトテニスばかりしていました」という

のは、根橋広樹さん（大学院公共政策研究科）。法学部時代には、行政

職で受験し、試験には受かったものの、内定がもらえなかった。今回は

法律職で受け、特に重要科目である

「止まっても仕方ないですからね」と1日平均12〜13時間、勉強したという。

「今回は2度目の挑戦だったので、1度目は試験の情報が足りず、落ちてしまいました。今年は予備



刑法、民法、行政法を重点的にやった。

「捨てるところは捨てて、重要な科目を重点的にやるのが合格につながる」という。そんな根橋さんは、春から文部科学省で働く。「資源がないなかで大切なのは人材。その人材をつくるのは教育です。また教育は、その人の職業や収入、暮らし方に長期間にわたって影響する。でも親の所得で教育に格差ができてきている。それを是正したいと思っています」というのが文科省を選んだ理由だ。

◆洪水対策に取り組み

国土交通省に内定を得たのは、出口桂輔さん（理工学研究科土木工学専攻）。修士1年のときに試験を受け、



3年の猶予があるのを聞いて、今年1年は研究に専念してきた、という。

「土木の世界では、立案までの段階は全て公務員が行い、企業側はその計画を進めるという役割分担があります。やるからには自分の思い描くようなことを実現させたい、立案

から計画まで、全て自分で考えたい、そんな気持ちが強かったから公務員という道を選んだんです」

国家1種の試験対策は大学の授業が全てだった。「試験にはほぼ毎年河川の問題が出てくるのですが、大学のテストで河川の問題が出たら、必ずパーフェクトに答えられるくらいまで勉強しました」。

研究室でも河川の洪水問題をテーマにした。国土交通省にデータ収集に行ったりもして、国交省を身近に感じるようになっていった。「日本の洪水対策は堤防による氾濫の防止が大半で、まだまだ未知な分野や開拓すべきところはたくさんあります」と意気盛んだ。

◆恩師のメールに目覚める

渡邊倫幸さん（大学院総合政策研究科）は、市役所（環境課）で仕事をしながら勉強し、受験。9月いっぱいまで仕事をこなし、10月から勉強に専念して、見事合格し、総務省

に内定を得た。



「昨年も受けたんですが、ダメだったんです。自分でも『もうダメだ。就職しよう』という諦めの気持ちが強くて、参考書も全部ヒモでまとめてしまった」。その時、世話になった先生から、「志を忘れるな」というメールが届いた。いつも怒られてばかりいた先生からのメッセージに目が覚めた。

「やりたいと思っていたことなんだから、簡単に諦めちゃいけないと。

もう一度頑張ってみよう」という気持ちになった。「あのメールがなかったら、今の自分は絶対じゃないです」という。

仕事と勉強の両立は生やさしいものではなかった。夜6時から7時に仕事が終わわり、それから夜更けの2時〜3時くらいまで勉強。翌朝は7時起きで家を出る毎日だった。睡眠時間は3、4時間だ。こんなハードスケジュールをこなすことができたのも、「食事などの世話をしてくれた家族のサポート、そして先生のサポートが非常に大きかった」と感謝の気持ちを忘れない。

◆国家予算を有効活用

財務省財務局に決まったのは、當間和幸さん（法学部）。司法試験の勉強をしていたが、途中で国家1種にきりかえた。

「省庁訪問で、防衛省や文科省をまわっているうちに、国家予算の重要性に気づいたんです。防衛省は



予算にしばられているし、文科省は予算をどう効率よく使うかが問題になっていた。予算を有効に活用していかないと国が動かない。それで、財政に興味をもち財務省にしました」という。

◆政府の長期方針に関わる

内閣府に内定を得たのは、千葉隼人さん（法学部）。「内閣府は、各省庁の調整役」という。「役所のなかでも、一定の価値観にしばられずに



独自の政策ができる」と内閣府を選んだ理由を語る。経済財政諮問会議の運営に関わるのが希望だ。「経済財政諮問会議は、政府方針の長期的な枠組みを決めるところなので、そこで日本のあり方を考えていきたい」と意気込む。

和やかに懇談が進んだ後、合格者が横一列に並び、代表して根橋さんが謝辞。「(サッカーの)岡田監督に似ているって人から言われます」と言って会場をわかせたあと、「祝

賀会を開いてくださってありがとうございます。自分たちの力だけでは、ここには立てなかったと思います。OBや先生、キャリアセンターの方々のおかげだと思っています」と謝意を述べるとともに、「中大の名に恥じないように、またOBの方々がしてくださったように、後輩の支援もしていきたい」と力強く抱負を語った。

最後に、井上彰・法学部長が閉会の挨拶に立ち、「国民から信頼される公務員として、国民のことを考えながらがんばって欲しい」と激励して、祝賀会を締めくくった。

